



## 慶應義塾大学ビジネス・スクール

### どんなギャップが出てくるのか楽しみです

5 平成大学ビジネススクールの大島和也は、人的資源管理を教える助教授の職にあった。大学院博士課程を修了して、教歴9年目に入ろうとしていた。彼のクラスの特徴は、発言によってクラスに貢献してくれる学生を高く評価することだった。大島は成績を構成する要素として、クラス貢献7割、筆記試験3割という成績配分を彼のシラバスに明記していた。

10 成績の7割が発言点によるものだという事は、他の科目と比べて、発言点のウエイトが極めて大きいことを意味した。極端な話、この科目ではペーパー試験を受けなくても単位が取れるのである。去年は寝坊して期末試験を受けなかった学生に、大島がBプラスの成績をつけ、単位を与えたということで少し話題にもなっていた。

15 大島も3年前まではクラス貢献点の構成比を5割にしていたのだが、他のクラスに比べて彼のクラスでは発言がかなり活発だという周りの評判もあったので、3年前に7割に引き上げた。今年は大島がクラス貢献点の成績ウエイトを7割にした3年目の年になる。これまでの2年間を振り返ると、クラス貢献点の構成比を引き上げたプラスの効果が十分に得られていると、大島は考えていた。今年の授業もスタートから発言が多く、活発な議論がなされていた。例年どおり、クラスはとても順調だと彼には思えた。

クラス貢献点のフィードバックを、3年前までは学期の途中で1回だけ行っていたのだが、クラス貢献点のウエイトを7割にしたことに合わせて、それからは学期の途中に2回行うよ

---

このケースは慶應義塾大学ビジネス・スクール博士・修士課程併設科目「ケースメソッド教授法特論」の教材とするために、竹内伸一(ケースメソッド教育研究所)が作成した。(2004.10)

本ケースは慶應義塾大学ビジネス・スクールが出版するものであり、ケースの複製等についての問い合わせ先は慶應義塾大学ビジネス・スクール(〒223-8523 神奈川県横浜市港北区日吉本町2丁目1番1号、電話 045-564-2444、e-mail case@kbs.keio.ac.jp)。また、ケースの注文は<http://www.kbs.keio.ac.jp/case/index.html>。慶應義塾大学ビジネス・スクールの許可を得ずに、本ケースのいかなる部分の複製、検索システムへの取り込み、スプレッドシートでの利用、またはいかなる方法(電子的、機械的、写真複写、録音・録画、その他種類を問わない)による伝送は、これを禁ずる。

うにした。それは学生からの要望に応じて行ったものである。クラス貢献点のウエイトが大きいのだから、フィードバックの機会も増やして欲しいという趣旨の求めだった。

5 今年も最初のフィードバックの日が訪れた。第8セッションの授業の冒頭10分を使って、大島は第7セッションまでのクラス貢献点をフィードバックするための個人メモを配ろうとした。そのときである。ことが起こったのは。

クラスではそれほど多く発言しない北山義信が「先生、ちょっといいですか」と前置きしながら次のように話し始めた。

10 「今学期の大島先生の授業での発言について、私たちは第1セッションからのクラス全員の発言回数を数えてきました。また、発言の質についてもこちらで評価したものを記録しています。質の評価は発言直後の大島先生の反応から推測してみました。『今の発言は最高!』などとよくおっしゃいますよね。そういうのを頼りにしてA・B・Cのようなものをつけてみました。先生がこれからお配りになるメモに書かれている評価と、私たちが試算した評価との間にどんなギャップが出てくるのか楽しみです。」

大島は頭が真白になり、その場で固まってしばらく声を出せなかった。